追悼記念号刊行によせて

デビッド・ワインスタイン 著
徳永　麻子 訳

このたびは、まえがきを執筆する機会をいただき、大変光栄に存じます。私の父も、こうして追悼されて光栄に思っていることでしょう。父を駒澤大学に誘い、仏教に導いた一連の出来事は極めて奇妙でした。のちに父はイェール大学で仏教の教鞭を執るに至りましたが、これを奇跡だという人もいるでしょう。私は父の業績を評することはできませんが、代わりに、父はどういう人だったか、そして父が日本に、駒澤大学に、そして仏教に辿り着いた経緯について記したいと思います。

1929 年に生まれた父は、世界恐慌渦中、ブルックリンの貧しい家族で育ちました。工場長であった祖父は職を失い、次いで住んでいた家も失ったため、当時の生活は貧窮を極めたといいます。父は自分の部屋がなく、ワンベッドルームのアパートのリビングでソファに寝ていたそうです。また、地元ではユダヤ人とアイルランド人のギャングが対立し暴力は日常茶飯事だったといい、学校に通うことすら困難だったそうです。父は宿題をしたためしがないと言い、その結果学校での成績は外国語以外、すべてひどいものだったといいます。常に何かに腹を立てては、反抗する方法を探していたそうです。

そして、日本は真珠湾を爆撃しました。当時 12 歳で世間に反抗的だった父にとって、この日本の行為は極めて法外で、無礼で、刺激的に映ったそうです。外国語への情熱を見出しつつあった父は、欲求不満を日本語の習得にぶつけ、のちにラテン語、ドイツ語、中国語、さらにはエジプトの象形文字など、多くの言語を独学で勉強するようになりましたが、それが学校の成績表に反映されることはありませんでした。父の両親は、ただでさえ狭いアパートに父が本を持ち込むのを許さなかったそうですが、やがて父は、新しい本を古い本に紛れ込ませることで家に持ち込んでも見つからないと学んだそうです。

まだ高校生の時、コロンビア大学の講師に語学力を認められた父は、

コロンビア大学での日本語の授業に招待されました。父の高校のカウンセラーだったキャメロン氏は、父のような成績の悪い学生が、コロンビア大学のような名門大学で授業を受けるべきではないと反対しました。それに対して父は、自分は語学には非常に秀でているし、ドイツ語の授業ではクラスでトップだと言って抗議しました。キャメロン氏は、それは父の家族が家でドイツ語を話すからだろうと反論したそうです。父は、自分の家族はドイツではなくポーランドから移住してきたのだといって対抗する代わりに、ラテン語でもトップの成績をとっているが、家族が家でラテン語を話しているとは思わないだろうと言い返したそうです。しかし、結局キャメロン氏の主張を曲げることは叶わず、父はコロンビア大学で勉強するのを許されませんでした。それでも日本語の勉強を続ける場合は、余暇の時間を使うしかありませんでした。

平均以下の成績とわずかな語学学習の記録では、父の大学進学への道は長かったといいます。父が受験したすべての大学から不合格の判定を受けた時は、それまで共に学んできた友人に別れを告げ、就職先を探し始めたそうです。そこで祖父は、父にネクタイの会社での仕事を見つけてきたそうですが、その3か月後父は解雇されました。その後祖父は、日本にある米国当局向けに文書を発行していた印刷会社での仕事の求人を見つけ、父に紹介してきたそうです。面接に向かった父は、日本で暮らした幸せな子供時代の話をし、その場で採用されました。後にそれが作り話であったことがバレたそうですが、父は日本語がとても上手だったので、解雇されることはありませんでした。そこでの仕事内容は、手書きの日本語の原稿を読み、活字印刷用の入力を設定することでした。父はよく、日本語を読むことができる人は多いが、その逆ができる人は少ないと話していました。

父が出版社で働き始めてから1、2年が経った時、父は徴兵されました。日本語の読解力が優れていた父は（当時まだ日本人と会話したことはなかったそうですが)、中国語と韓国語の理解もあったため、軍事情報部隊に入れられました。しかし、軍事情報部隊入隊には、身辺調査を受ける必要がありました。警官が「1942年、12歳のときに日本語を勉強し始めた理由は何か」と訝しげに尋ねた時、父は軍事情報部隊に入隊できないかもしれないと思ったそうです。自分が日本語を勉強するようになった心理的な過程を警官が理解できるわけがないと思った父は、独自の機転を利かせて「敵をよりよく知ることが自分の義務だと悟ったからです！」と答えた

といいます。父は身辺調査をパスし、日本へ送り出されました。

父は、韓国ではなく日本へ派遣されたことを喜びましたが、日本での滞在は短かったそうです。父は到着してすぐ、生まれて初めて占い師のもとへ行きました。その占い師は、父の手のひらを見て、まもなく悪い旅行に行くことになるだろうと言ったそうです。父は、日本に派遣されたばかりなので、それはあり得ないと言い返したといいます。しかし2日後、父はソウルへの移送命令を受けました。以後、父が占い師のもとへ行くことは二度とありませんでした。

韓国では、父は軍事情報を求めて北朝鮮の文書を翻訳する部隊を率いました。韓国に滞在中、父は、一緒に働く日系アメリカ人や、日本による占領期間中に日本語を学んだ韓国人の兵士と友達になり、彼らとともに日本語会話力を切磋琢磨しました。

任務満了とともに、父は退役軍人に奨学金を提供するGI Billを利用して、日本の大学に行くことにしました。当時、アメリカの学生を受け入れる日本の大学はほとんどなく、駒澤大学はその数少ない大学のひとつでした。父は駒澤に出願し、入学許可を得ました。

駒澤で過ごした時間は、父の人生の中で最も幸せな時間の1つだったそうです。入学前父は結婚し、父と母（東京藝術大学の留学生）は共に日本について学びました。父が仏教を真剣に研究し始めたのもこの頃でした。また、駒澤大学は、父が彼の研究のメンターとなる保坂玉泉教授と増永霊鳳教授と出会った場所でもありました。

父は、駒澤で真に成長することになりました。父は、受講するすべての授業に真摯に取り組み、生まれて初めて優秀な生徒になりました。その結果、父はクラスの最優秀生徒となり、卒業式で卒業生代表を務めることになりました。しかし、外国人がクラスの最優秀生徒として卒業生代表を務めることに不満を感じた同級生の一部は、卒業生代表は日本人であるべきだとし、代わりに父は外国人学生として最高の（そして唯一の）賞を贈られるべきだと提案しました。これを聞いた保坂教授は強硬に介入し、父は卒業生代表の名誉に値すると主張、結局、保坂教授の主張が通り、父は卒業生代表として答辞を述べました。これは、かつて援護してくれる教師をもったことがなかった父にとって、大きな意味を持ちました。これが、父のキャリアのターニングポイントとなり、のちに父が東京大学とハーバード大学で学び、ロンドンの東洋アフリカ研究学院とイェール大学で教鞭を

執る自信と能力を与えました。

保坂教授のサポート、親切な配慮、指導は、父に大きな影響を与え、父が保坂教授のご厚意を忘れることはありませんでした。父を知っている人がよく覚えているように、父は、壁のほとんどが本棚で覆われた小さな書斎で研究に励みました。本棚に覆われていないごく一部の壁には、父がそこで研究をした約 50 年間、保坂教授の写真を据え続けました。父が「唐代の仏教」を出版したとき、「私を中国仏教の聖典の奥深さに誘うために、時間と労力を惜しまなかった、真摯な学者であり菩薩の理想の姿を自身の生活に体現した、駒澤大学の保坂玉泉先生と増永霊鳳先生への感謝の気持ち」をまとめました。

父は、父の駒澤大学での先生たちの強靭さと思いやりを、自分の教えにも取り入れたのだと思います。父は、生徒だけでなく父自身に対しても、高い水準を設定していました。父の生徒は、予習不十分で来る者には容赦ないゼミのため、熱心に予習をしてきました。また、私は、生徒の前で恥をかかないよう、父が自身のゼミの準備に膨大な時間を費やしていたのも知っています。

子供のころを振り返ると、大学院生とも呼ばれる「奇妙な里子」がたくさんいる家庭で育ったような気がします。彼らはみな、剥げていたりポニーテールだったりと、面白いとしか形容しようのない髪形と、仏教に対する一風変わったアイデアをたくさん持って家に来たものでした。それに対して父は、夕飯を兼ねた仏教テキスト購読セミナーと、それに続く飲み会、そして当時の社会や政治的な問題についての議論を毎週開催することで、可能な限り彼らを「文明化」しようとしました。

父は、生徒を学者としてだけでなく、人としても扱いました。また父は、よく生徒が父の教授としての善し悪しを諮るべきだと言いました。しかし私は、父が本当に意味したのは、他のどの親とも同様、父の個人的および職業上の成功と失敗が父自身を審判するのだ、ということだったと思います。父の生徒の成功は父自身の成功であり、親と同じように、父の生徒の成功は、父の助言によるかどうかに関わらず父の責任であるとしました。同様に、父の生徒たちの試練、苦難、そして時に悲劇すらも、父には重くのしかかりました。父は自身の生徒たちを非常に誇りに思っていましたし、父はこの本をさらに誇り高く感じたでしょう。

私が生徒と仏教学へ父が残した影響をまとめるよりも、父の生徒に最後

の言葉をいただくほうが、より適切でしょう。父の学生は、現在世界のトップ大学の多くで教鞭を執っており、数多くの学生を仏教の研究に誘ってきました。これは、私の父が残した最も重要な遺産の1つです。父が亡くなった後、私は、彼らの私に対する心遣いと父への献身に圧倒されました。最後に、父の最初の生徒の1人であるTim Barrettが、Barrettら生徒の感情をまとめた文書を引用します。

> 彼のすべての研究に終止符が打たれた今、残された彼の生徒たちは、彼のように日本の瑜伽行唯識学派の研究を続けることができないと後悔するだけである。もしかすると、それは私たちの業にはないものなのかもしれない。しかし彼は、複雑ではないながら耐久性のある何か、すなわち、学ぶことへの情熱や、悠久の東洋仏教の知的な奥深さへの理解を私たちに伝えた。今度は、彼に代わって私たちが彼のエネルギーと忠誠を若い世代に伝えることで、唯一無二の愛と理解を後世へ引き継ぐことができるだろう。これは、私たちが彼への借りを返すことができる唯一の方法であり、彼にとって、最高の記念碑となるだろう。